

柏原市遺跡群発掘調査概報

1992年度

1993年3月

柏原市教育委員会

序 文

柏原市が開発等に先立つ緊急発掘調査を独自に実施するようになり十余年が経ちました。その間、市内の多くの貴重な文化遺産の存在を市民の皆さんに知っていただけるようになりました。また、それらが現代や未来にもたらず重要性から保存、活用法についてご助言、ご指導をいただいているところです。遺跡内における開発に際しても、計画の中に遺跡の保存を盛り込むことも開発側のご協力、ご理解のもとに可能になってきました。

今回ここに報告する中にも、遺跡保存の趣旨を十分にご理解頂き、計画の縮小により現状保存が実現した例もあります。こうしたご厚意に今後どう具体的に報いるかが私たちに与えられた課題です。

我々が実施している発掘調査は掘ることだけが目的、仕事ではありません。歴史的事象を継承するための一つの手段にすぎないことを知って頂き、さらなるご理解とご協力を賜るようお願い致します。

平成5年3月

柏原市教育委員会

教育長 庖 刀 和 秀

例 言

1. 本書は柏原市教育委員会が平成 4年度に原因者負担事業として実施した、平尾山古墳群92-4次、大県南遺跡92-5次の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課 石田成年が担当した。
3. 調査及び報告書作成に際し、次記の諸氏の参加、協力があった。(順不同・敬称略)
奥野 清 谷口鉄治 分才隆司
秋田大介 小野洋行 西島伸彦 棕本徹夫 山口 剛
津田美智子 阪口文子 酒井英利香 有江マスミ 乃一敏恵
4. 調査に際し、次記の関係各位には格別のご配慮を賜った。記して謝意を表します。
宗教法人普門山妙法寺 中野工業株式会社
古村正義氏 三田建築設計事務所
5. 出土遺物の資料調査に際し、多数の方々にご教示、ご助言を賜った。その結果報告については紙幅と整理期間の都合上、別稿を起すこととする。また八尾市立曙川小学校奥田尚氏には石室および石棺石材等の観察結果についての玉稿を賜った。記して謝意を表します。
6. 本書図中の方位は磁北、標高はT. P. で表示した。
7. 調査に際し、写真、実測図、カールスライド、ビデオを記録として残した。また出土遺物は写真、実測図と共に歴史資料館にて保管している。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
第1章 平尾山古墳群	1
第2章 大県南遺跡	13
図 版	

92-4 次調査

- ・調査対象地 柏原市大字安堂1060-1 他 5筆, 大字太平寺660 他 4筆
- ・調査期日 1992年6月9日～9月7日
- ・対象面積 8340.47㎡

1. 調査概要

当該調査は寺院建設用地造成工事に伴う事前発掘調査である。

当該地は平尾山古墳群の西端近くに位置し、1980年に大阪府教育委員会が実施した分布調査（『柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書－国道25号線建設に伴う埋蔵文化財予察調査報告－』大阪府教育委員会, 柏原市教育委員会1980）により新たに発見された前方後円墳1基、円墳1基を包蔵する。本調査に先立ち5月に実施した試掘調査により最高所に円墳を、また北側平坦地に遺物を包含する溝を検出した。他数カ所に調査区を設定したが、遺構、遺物は認められなかった。本調査はまず円墳を対象とし、北側平坦地については工事直前に調査を、また対象地全域については工事時に立会調査を実施することとした。前方後円墳については当初計画変更により保存が図られることとなったため、調査対象外とした。なお、調査に要した諸費用は申請者である宗教法人普門山妙法寺の負担による。

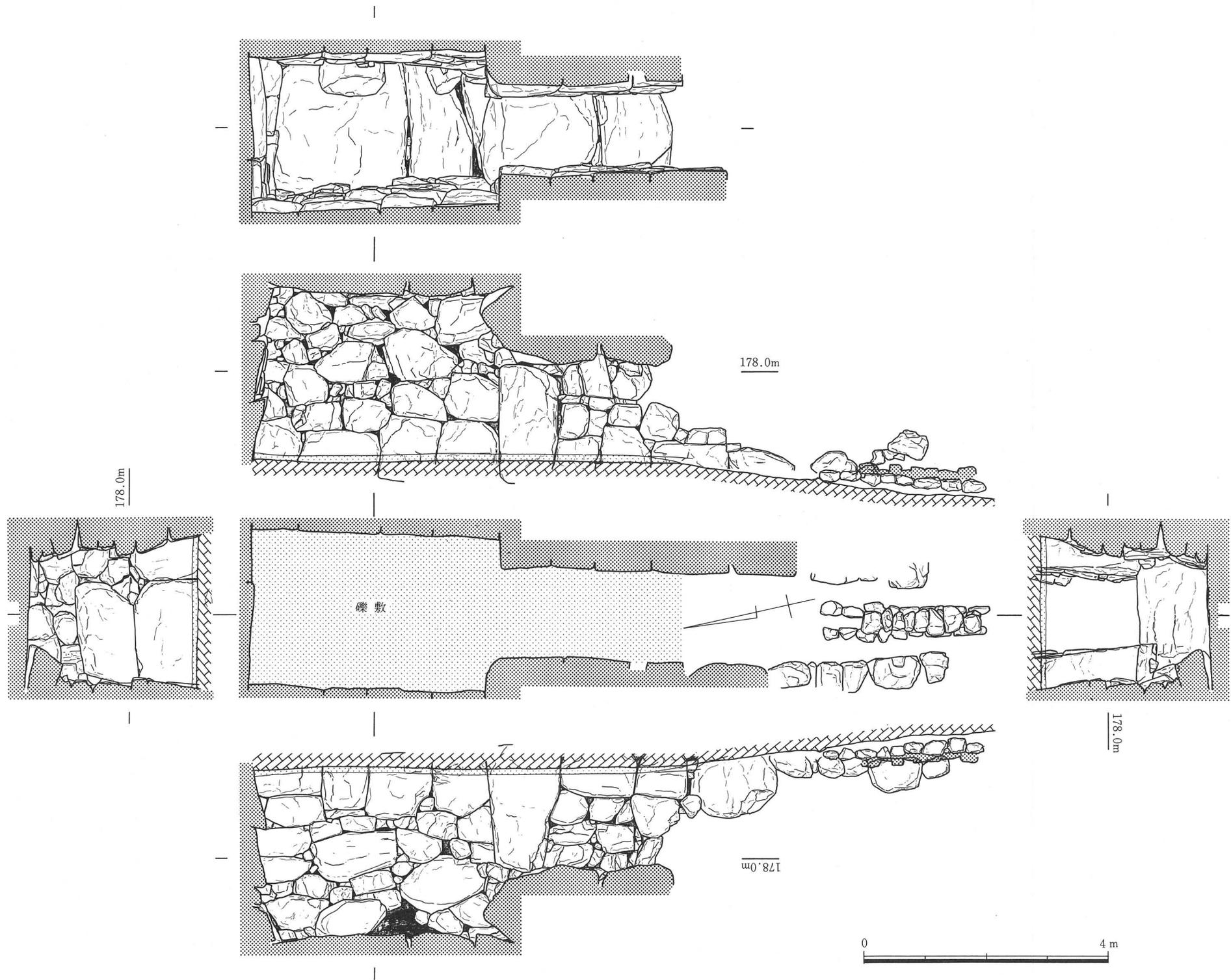
調査の対象とした円墳は既往の周辺地の調査、立地等から、平尾山古墳群平野大泉第20支群3号墳と呼称する。本墳は高尾山から南へ伸びる主尾根の南端にあり、大阪平野を一望できる眺望の優れた高所にある。標高は184.085m。墳丘東半部は果樹園、西半部は葡萄畑により地形改変が行われ、特に南から西にかけて著しい。墳丘に設定した調査区等から、墳丘径は約26mと考える。石室は過去に果樹園等の納屋がわりに使用されていたようであるが、前述の大阪府教委の分布調査時、及び今回に先立つ試掘調査時には閉口していた。

2. 石室

本墳の内部主体は南に開口する両袖式の横穴式石室で、石材は主に生駒山地で産出される花崗岩が用いられている。現状では後世の盗掘、石材採取により、羨道の南半は基底石を残すのみである。他はほぼ完存に近い。法量は石室全長11.4m、玄室長4.0m、玄室幅2.5m、玄室高2.8m、羨道長7.4m、羨道高1.7m、羨道幅1.5mをそれぞれ測る。

石室床面には径5cm程度の河原石を用材とした厚さ10cmの石敷が施される。調査時には玄室から羨道中央にかけての検出であったが、希薄ながらも本来羨道全面にも施されていたものと思われる。羨門近くには長さ265cmの暗渠状の排水溝が設置される。素掘り溝の両壁に石を立て、蓋石をのせた形態のものである。この排水溝は南北両方向には延びないようである。また羨門には閉塞石が高さ55cm遺存する。

棺材の出土状況から玄室には石棺、羨道には木棺がそれぞれ石敷上に安置されていたと思わ



第2図 横穴式石室

れる。羨道東半には木棺の棺台になるかと思われる石材がある。敷石除去後、玄門から羨門方向0.9~1.0mに地山を穿つピットを両側壁寄りに検出した。それぞれ東側は径15cm、深さ10cm、西側は径20cm、深さ17cmを測る。石室構築か、玄門閉塞に伴うものであろう。

3. 遺物出土状況

遺物として、須恵器38点、土師器6点、環頭、馬具3点、鉄鏃2点以上、釵子、玉類17点、釘16点以上、鏃6点以上、石棺片コンテナ20箱分が出土した。

土器類は玄室から羨道にかけて出土し、特に玄門に集中する。幾重にも重なるという状況であった。挿図番号1~30、38~41は玄門付近、31~36は羨道、37は石室外からの出土である。

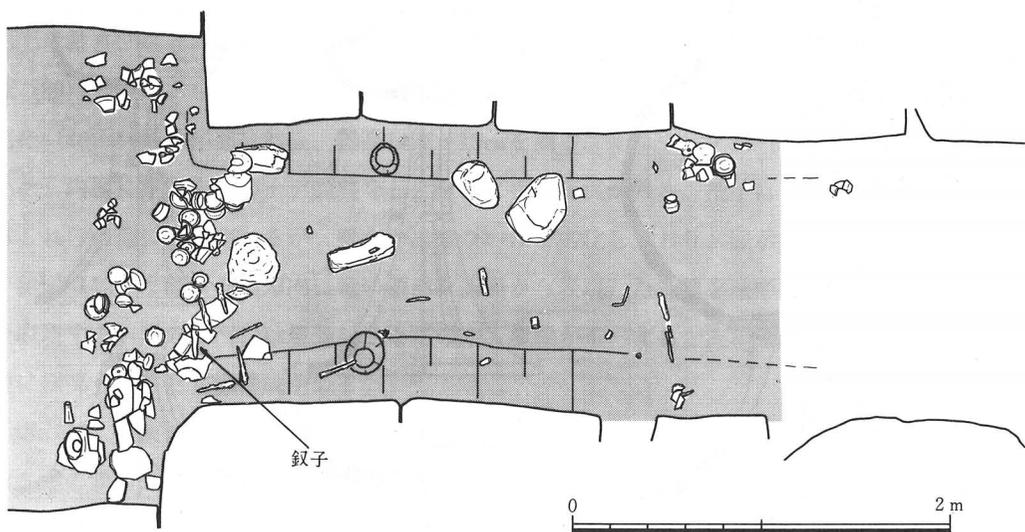
ミニチュア竈(36)は、羨道の中央両側壁際から半個体ずつ出土した。前述の石敷上ではなく、破片として石と混在して出土したことから、墓前祭祀の一形態として半裁されて埋置されたものか、追葬時に片付けられたものか、また出土状況が明確に把握されている滋賀県内での出土例と比較すると、玄室での出土が多いのに対し、本例は羨道の半ばからの出土という点で、滋賀県のそれと大きく異なる。今後の検討課題の一つである。

環頭は羨門から南に3.5m離れた地点で出土。石室より持ち出されたが、盗掘者が落して行ったようである。須恵器有蓋高杯(37)もその付近からの出土である。

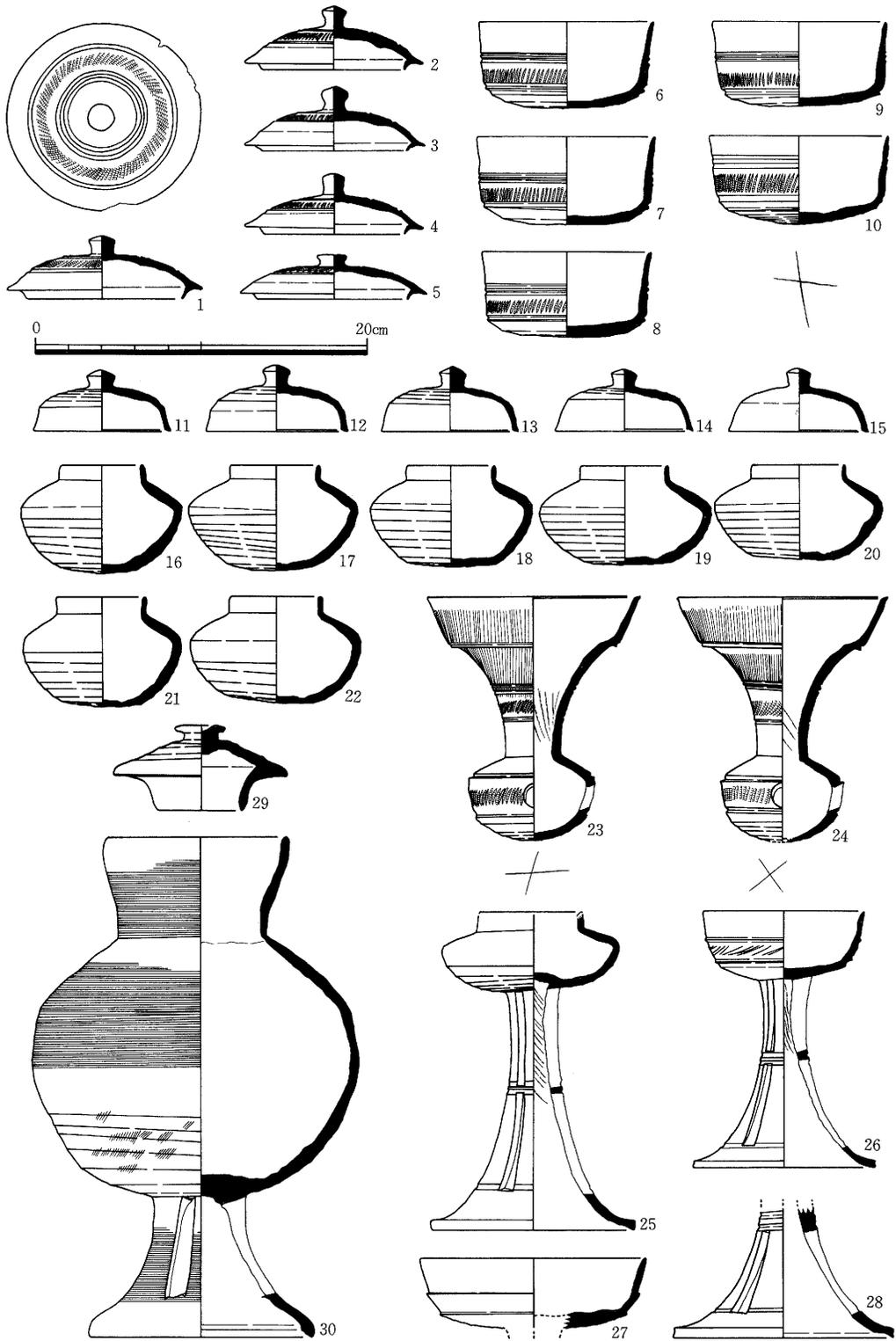
馬具類は玄室の中軸線上、奥壁寄り、石敷上から出土した。轡(43)は銹着状況から、折り畳むかのように引手をクロスさせて埋置されていたようである。石棺に伴うものであろう。

釵子は玄門西寄り、石敷直上に出土した。木棺の頭部付近にあたる。

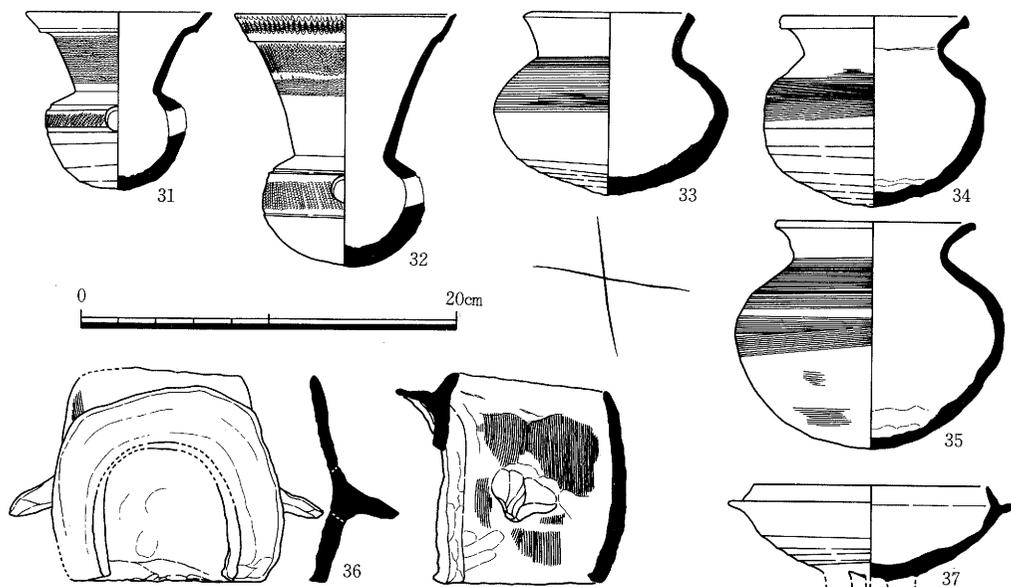
釘、鏃は羨道のみでの出土で、羨道西半の長さ255cm、幅65cmの範囲内におさまる。その範囲は棺の大きさ、埋葬位置を示すものであろうか。しかしその範囲内に棺台状の石はなく、東に



第3図 遺物出土状況



第4圖 出土遺物(1)



第5図 出土遺物(2)

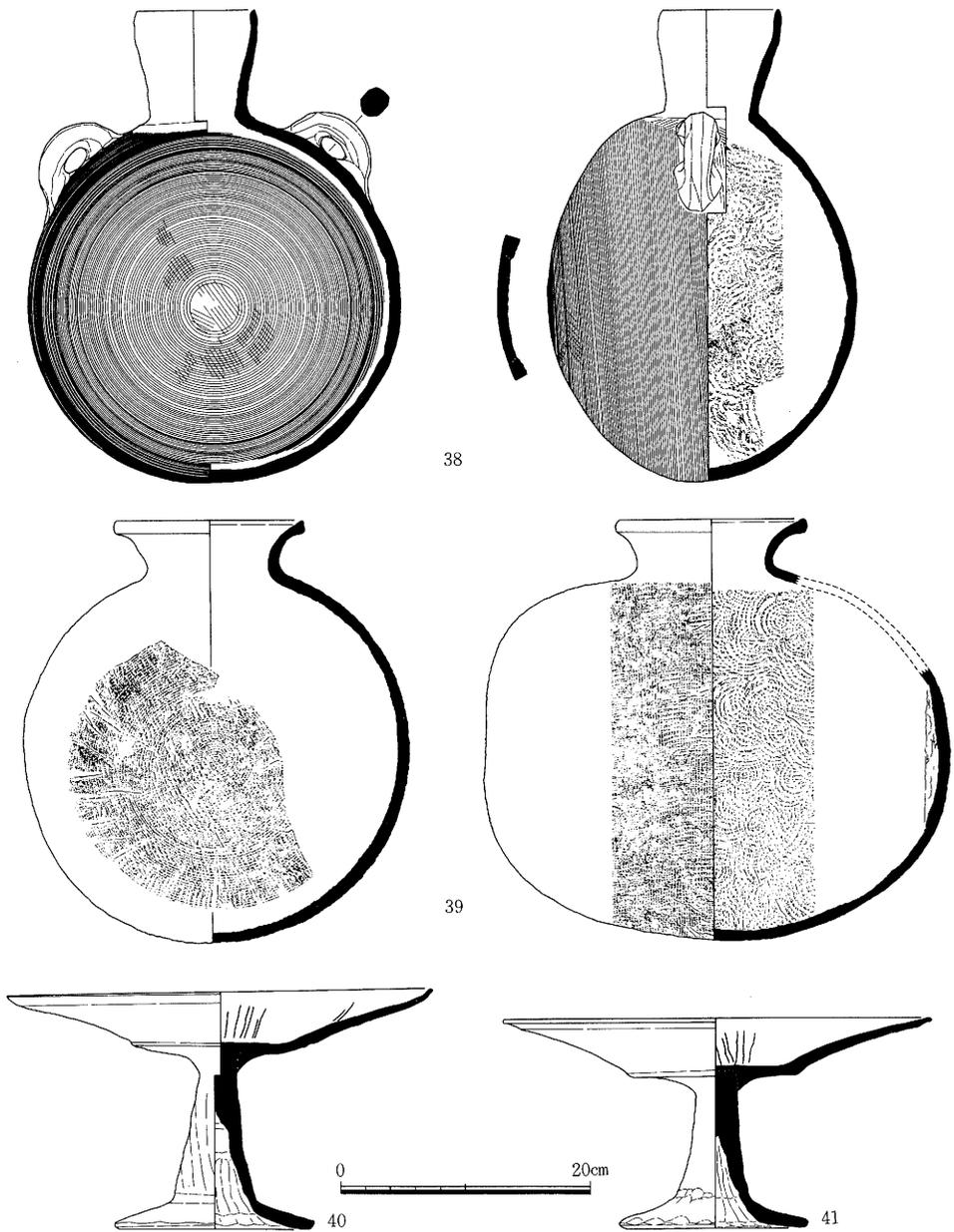
それと思しき石があることから、棺台上にあったものが人為的に西側に移動された可能性もある。石棺片は玄室内流入土に混じり、敷石上面からは遊離していた。羨道からはほとんど出土しなかった。玉類についても同様である。

4. 遺物

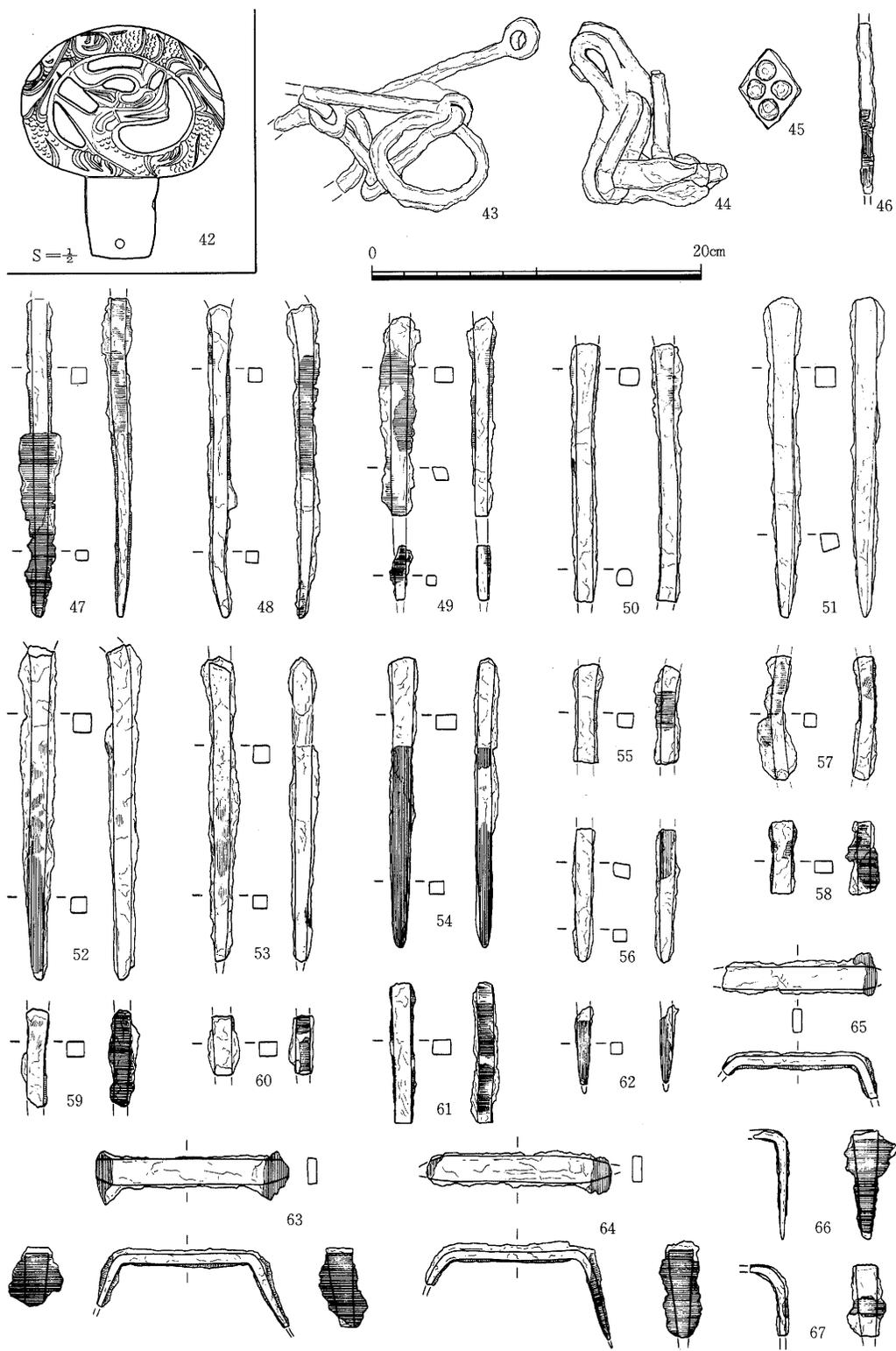
須恵器で特徴的なものは、セットになる蓋と杯である(1~10)。天井部や底部に数条の沈線を施し、その間に刺突文を巡らせる。全体的に丁寧、シャープな造りで、特に杯の外表面底部のヘラ削り調整は同心円状を呈し、通有の回転ヘラ削り調整に比し、より丁寧な印象を受ける。胎土は精良、焼成は堅緻で良好。提瓶(38)は体部径が29cm、厚さ24.5cmと異様に大きい。横瓶(39)についても胴部径29.5cm、胴部長37cmと同様である。大型の器形は土師器にも見られ、高杯(40、41)は杯部径34cm、器高14.2~15cmを測る。ミニチュア竈(36)は外面に縦方向のハケ、内面に不定方向のナデ調整をし、全体に指頭圧痕が残る。把手は下向きである。土師器はこれらの他に壺等があるが、接合が出来ないほど劣化しており、図示は不可能である。

環頭(42)は環状の柄頭内に竜の頭部を側面から表現した装飾を透彫し、さらに外環に竜身を表現する。茎の片面には緩衝材となるのか、繊維が遺存する。高槻市塚原古墳群P1号墳出土例に細部も含めた文様構成が似る。

轡(43)は鉄製板状立間素環鏡板付轡。銜の環により鏡板と引手が連結される。兵庫鎖(44)は3連の鎖の一端に鉸具がつく。縁金を欠き、刺金のみ残る。方形飾金具(45)は菱形の四隅に円頭鉸を打ち付けたもので、鉸足が僅かに裏面に出る。これら馬具類については銹化が著しく細部の形状は不明。鍬(46)は長頸鍬。両端部を欠くので法量、刃部形態は不明。茎部には



第6図 出土遺物(3)



第7図 出土遺物(4)

木質が残り、樹皮が巻かれている。

玉類は径3～5mmのガラス小玉が14点。淡い緑色と淡い青緑色の2種がある。丸玉は径12mmで濃い紫色を呈する。他に淡い緑色、濃い紫色の破片がある。

釵子は検出時の全長約15cm。現状で観察するに有機質、おそらく木質を芯とし、金箔を直接張るようである。既に芯の有機質が腐食により脆弱し、失われ、金箔のみが残る箇所もある。検出時にも細心の注意を払ったつもりであったが、取り上げるにも極めて困難な状況であり、原形を大きく損ねることとなった。反省すべき点である。

石棺は悉く破壊されており、復元が進んでいないこともあり原況を知り得えない。法量がわかるもので厚さ13～20.5cm。赤色顔料の塗布や、組み合わせのための切り欠きを施す部品もある。採集した遺物コンテナ20箱分の破片のうち、20～25%が神戸層群の凝灰岩である。

5. まとめ

棺材の出土状況から本墳における埋葬は石棺と木棺の2種2度で、おそらく玄室の石棺が初葬、羨道の木棺が追葬と思われる。玄門出土の土器群と羨道出土の土器群には形式的に明らかに時期差が認められ、羨道の一群が先行する。そうした状況を勘案し、羨道遺物が石棺埋葬に、また玄門遺物が木棺埋葬に伴うものとする、初葬が6世紀後半、追葬が7世紀初頭と考えられる。

遺物については特徴的なものが数点ある。須恵器杯、蓋のセット、大型の須恵器提瓶、土師器高杯、木質と見られる釵子、神戸層群の凝灰岩等である。他、ミニチュア竈については、柏原市内遺跡では高井田横穴群に次いで2例目であるが、出土状況が判る例としては初見である。

筆者の力量不足、及び豊富な出土遺物に比して概報作成までの僅かな整理期間に起因して、本墳の位置付け、結論を見いだすには到らなかった。本墳は平尾山古墳群の既往の調査の中でも、出土遺物において質、量とも突出している。これを本墳の古墳群中におけるある種の優位性、特異性とするか、或はこれが古墳本来のあるべき姿なのか。盗掘、後世の再利用等により主体部の状況が原況を留めることが少ない本古墳群では、遺物やその出土状況を通しての古墳間での比較は困難を極めるが、既往の調査の洗い直し、視点を変えての検証により、いずれ何らかの形で報告として纏めることとしたい。ご教示、ご助言賜れば幸いである。

○石棺材について

石棺は組合式家形棺と推察される。出土したのは全て砕かれた破片のみである。破片の石種は白色の流紋岩質凝灰角礫岩と白色の流紋岩質凝灰岩である。破片の量は前者が多く、後者が少ない。破片であるため、同一の石棺に使用されたものか、2棺以上あったのか不明である。

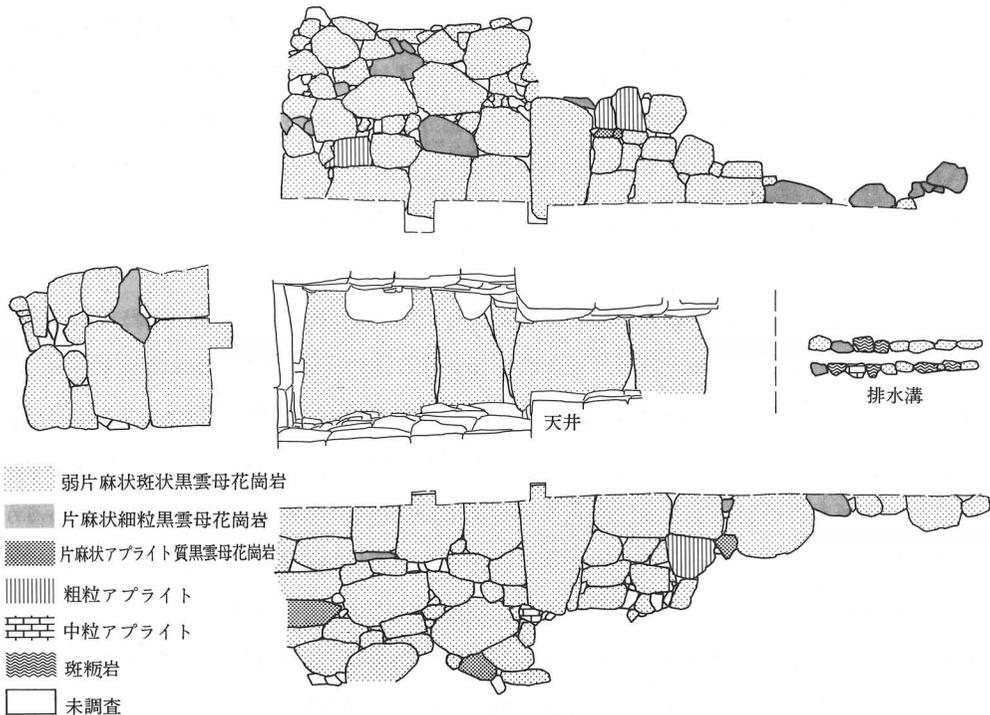
・石種とその特徴

流紋岩質凝灰角礫岩の流紋岩質凝灰岩の岩相についてのべる。

流紋岩質凝灰角礫岩：色は白色である。礫は松脂岩と軽石である。松脂岩は黒色、礫形が亜角～亜円、礫径が最大4.5cmに及び、量が多い。軽石は白色、礫形が亜円～円、礫径が最大5cmに及び、量が中である。基質は白色、緻密で柔らかい。

流紋岩質凝灰岩は白色で、細粒なもの、やや粗粒なもの、層理が見られるものなどがある。いずれにも火山ガラスが含まれる。植物の葉の化石が含まれるものがある。葉の一部しか観察出来ないが、ノウゼンカヅラ科、シナノキ科かムクロジ科の植物の葉であろう。

細粒の流紋岩質凝灰岩：色は白色である。砂粒は流紋岩、火山ガラス、石英、長石である。流紋岩は灰色～暗灰色、粒形が亜角、粒径が0.2mm、量がごくごく僅かである。火山ガラスは無色透明、粒径が0.2～0.3mm、量が多い。粒形は貝殻状のものが多く、フジツボ状、束状が僅



第8図 石室材石種

かである。石英は無色透明、灰色、粒形が角、粒径が0.2mm、量がごく僅かである。長石は無色透明、粒形が角、粒径が0.1~0.2mm、量が僅かである。基質は白色、緻密である。

やや粗粒の流紋岩質凝灰岩：色は白色である。砂粒は軽石、火山ガラスである。軽石は無色透明、黒色透明で火山ガラスが固まったものが粒状となっているようである。量が僅かである。火山ガラスは無色透明、粒形が貝殻状、束状で、粒径が0.2~1mm、量が多い。基質は白色、緻密である。

層理がみられる流紋岩質凝灰岩：色は白色である。層理面に沿って割れている。砂粒は流紋岩、火山ガラス、石英、長石、角閃石である。流紋岩は暗灰色、黒色で、粒形が角、粒径が0.2~0.8mm、量が中である。基質はガラス質である。火山ガラスは無色透明、束状、量が僅かである。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2~1.5mm、量が非常に多い。複六角錐あるいはその一部がみられるものが多い。長石は無色透明、粒形が角、粒径が0.3~0.5mm、量が僅かである。短柱状の自形をなすものが多い。角閃石は黒色、粒形が角、粒径が0.1~0.2mm、量がごくごく僅かである。自形をなすものが僅かにみられる。基質は白色、緻密である。

以上のように流紋岩質の岩相には構成砂粒に変化が見られるが、火山ガラスが含まれることなどから、同じ層内の岩相変化とも推察される。

・石材の採石地

20-3号墳を中心として、近距離で求めることが出来る石材の採石地を推定する。

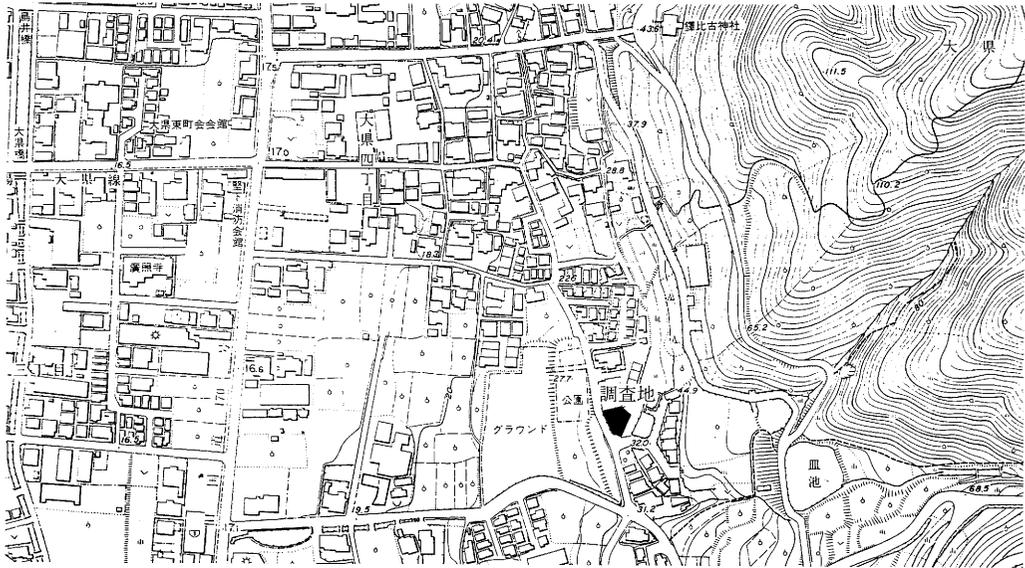
流紋岩質凝灰岩礫岩は松脂岩や軽石を含み、溶結していないことから、二上層群下部ドンブルポー層の溶結していない岩相に酷似する。場所としては南河内郡太子町牡丹洞東方付近が推定される。流紋岩質凝灰岩は植物化石を含み、火山ガラスが含まれ、層理がみられる凝灰岩であることから、神戸市西方に分布する神戸層群の白色凝灰岩の岩相に似ている。場所としては、白川峠付近から西に分布する植物化石を含む凝灰岩が推定される。

○おわりに

観察出来得た岩石、砂礫の観察結果、本墳を造るために次のようなことが行われたと推定される。石室の構築に関しては、石材を東方の谷から運び上げ、石室内の敷石は西方の大和川から運び上げた。石棺材は牡丹洞付近や遠く神戸の西部から運んだ。祭りに使った土師器や須恵器の少なくとも一部は土師の里付近で製造したものを使用した。

石棺材に神戸層群の凝灰岩が使用されている例は神戸市から池田市付近にかけてはあるが、河内では初めての例である。古墳時代後期の家形石棺の石材には地域性が見られるが、時々、かなり遠地から運ばれている例がある。このような例にこの古墳の石棺も属するのだろうか。※本来、玉稿全文を掲載すべきところであるが、紙幅の都合上、奥田氏の了解を得た上で石棺の観察結果のみ抜粋した。何れ全文掲載の機会を持ち、責を果たすこととしたい。

第2章 大県南遺跡



第9図 調査対象地位置図(1/5000)

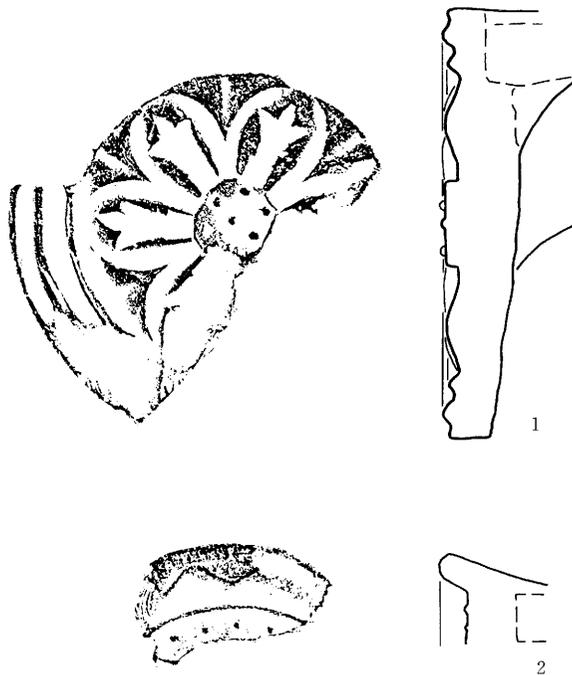
U92-5次調査

- ・調査対象地 柏原市大県4-487-1
- ・調査期日 1992年9月1日
～9月4日
- ・対象面積 316.43㎡

当該調査は共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。現況は畑地である。試掘調査を1992年8月27日に実施し、ピット状遺構、遺物包含層を検出したため本調査を実施することとなった。調査に要した費用は、依頼者である古村正義氏の負担による。

調査は上層を重機で除去し、以下遺構面まで人力により掘削した。

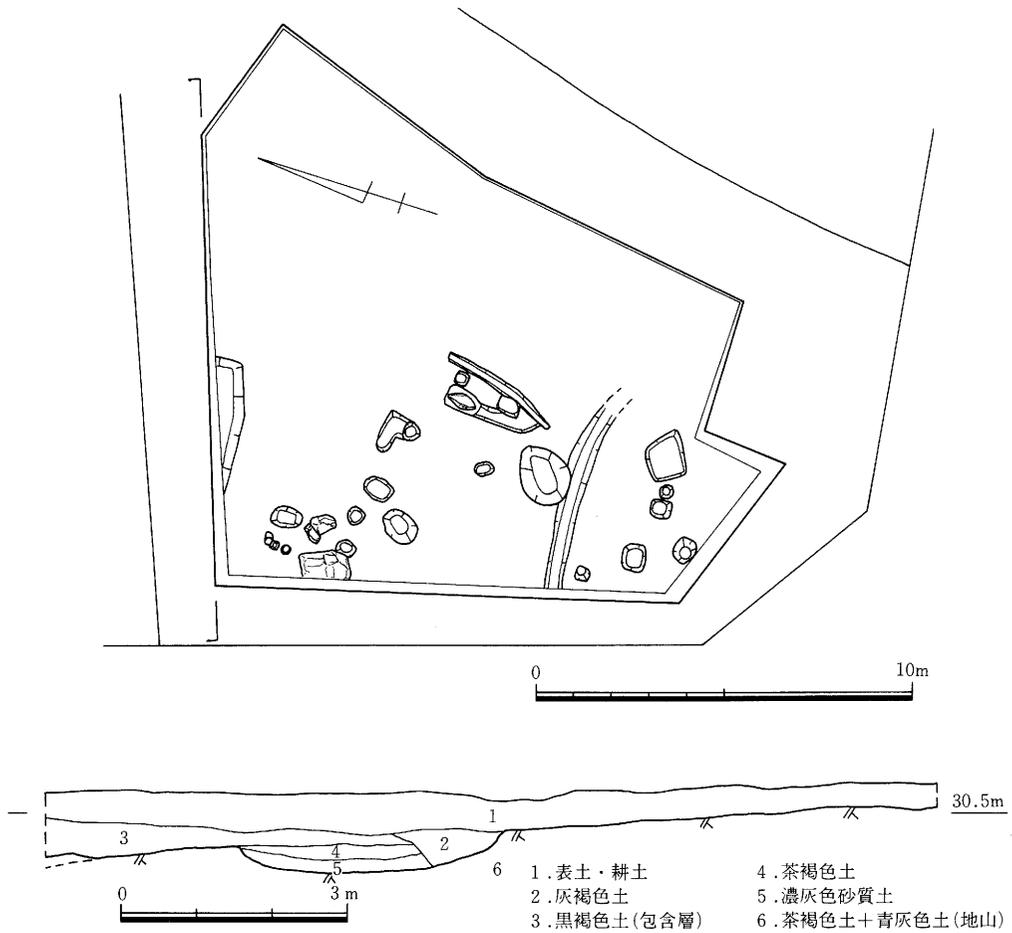
地山は西方向へ傾斜し、各土層も西方向に厚くなる。



第10図 出土軒丸瓦(1/3)

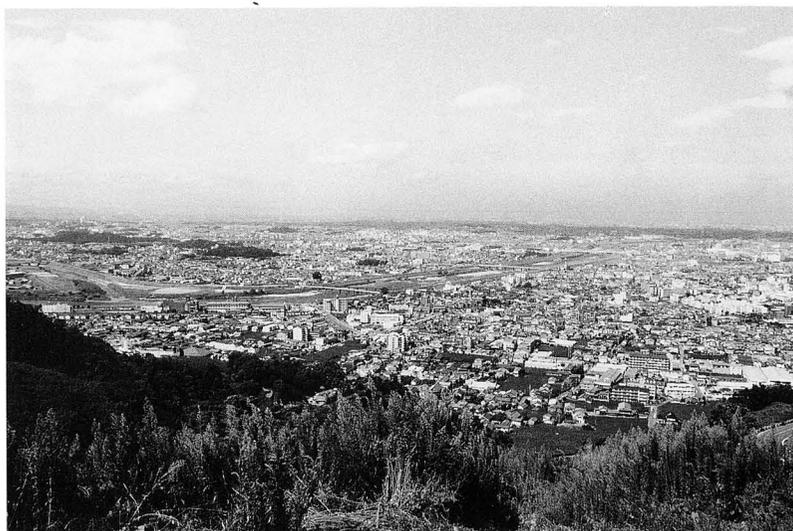
遺構としてピット、土壇、溝を検出した。方形堀方のピットで、その埋土中に山下寺出土と同様の平瓦を含むものもある。ピットの深さは40～50cm、土壇、溝は～cmを測る。これらで構成される建物、あるいは柵の規模はわからない。溝については後世の土地利用時のものと見られる。表面採取及び遺物包含層、遺構埋土から土器類、瓦類の出土があった。土器類は通常の須恵器、土師器で破片ばかりである。軒丸瓦2点を図示した。表採である。第10図1は忍冬六弁蓮華文。既往の調査¹⁾でV型式に分類されるものである。中房には1+6の蓮子を配する。蓮弁中に忍冬文が陰刻される。瓦当と丸瓦の接合部には接合が密着するよう連続するX型の刻みがみられる。2は周縁部に鋸歯文がめぐる。

1) 『大県南遺跡－山下寺跡寺域の調査－』1985 柏原市教育委員会



第11図 遺構平面図・北壁断面図

版 圖



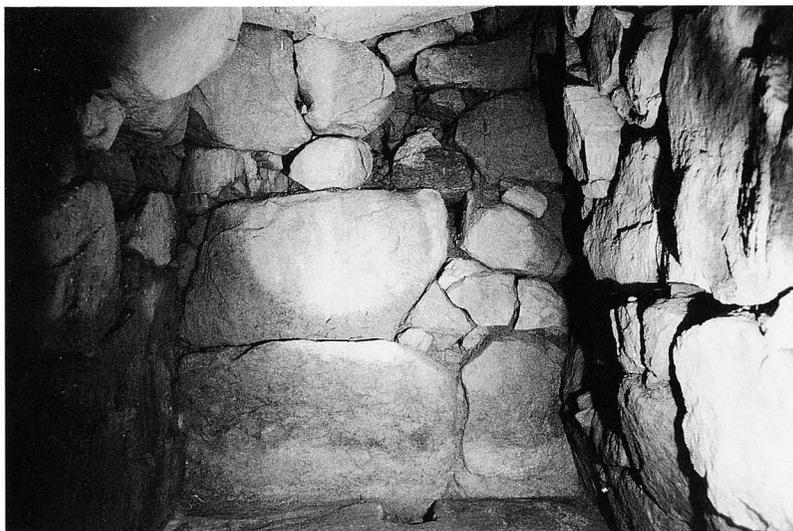
西への景観



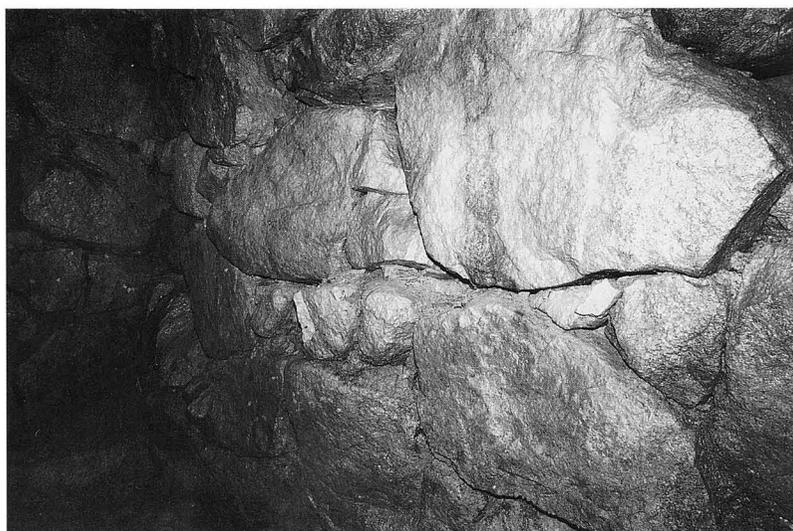
墳丘(北から)



開口部(南から)



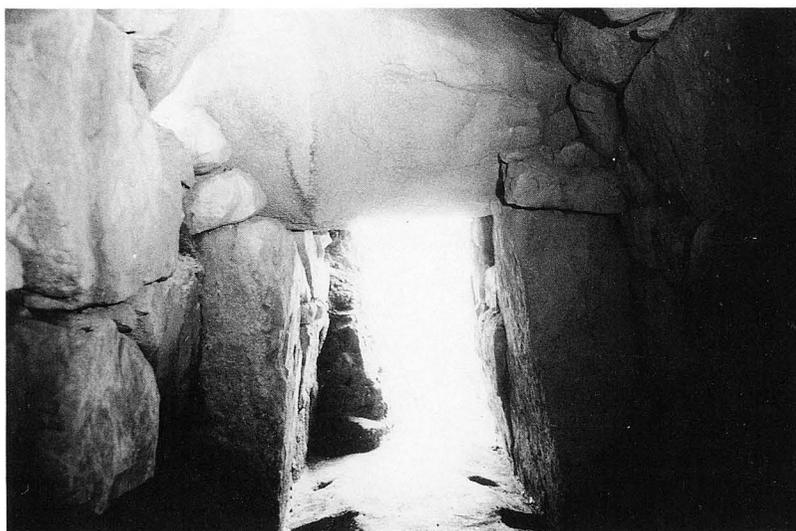
玄室奥壁



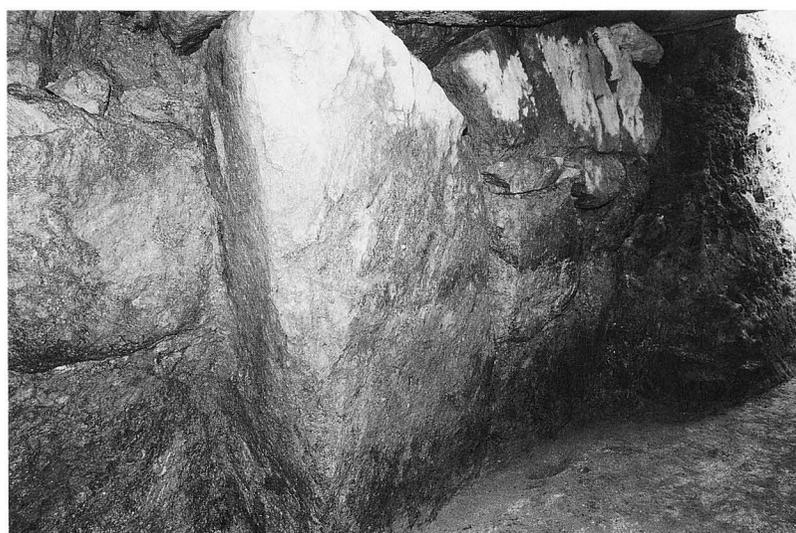
玄室東壁



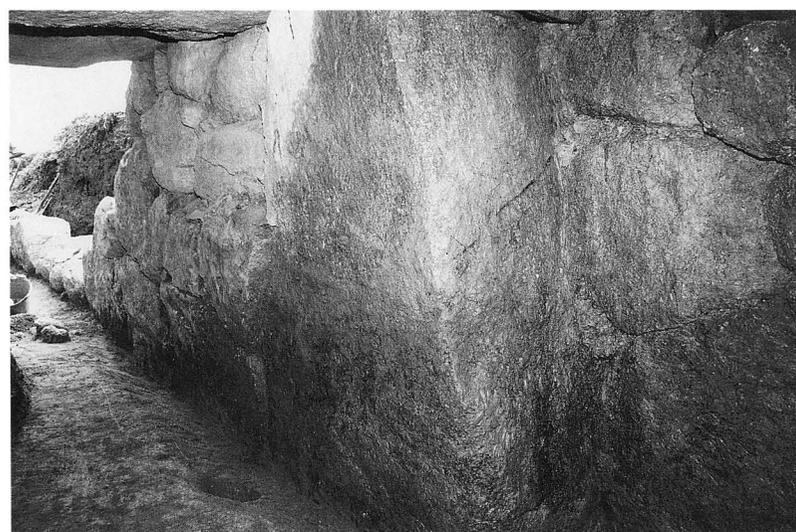
玄室西壁



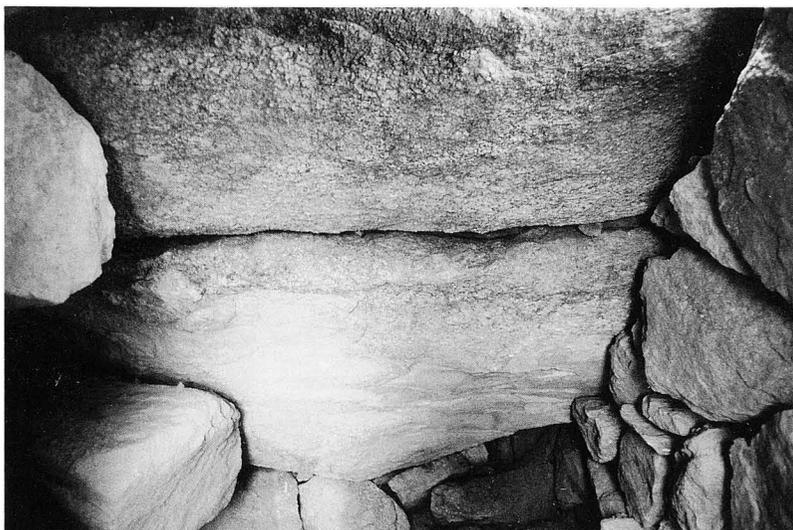
玄門



羨道東壁



羨道西壁



玄室天井



羨道地山面（南から）



閉塞石（北から）



土器類出土状況
(玄門、北から)



釵子出土状況
(玄門、北から)



環頭出土状況
(墓道、西から)



須恵器（杯、蓋）



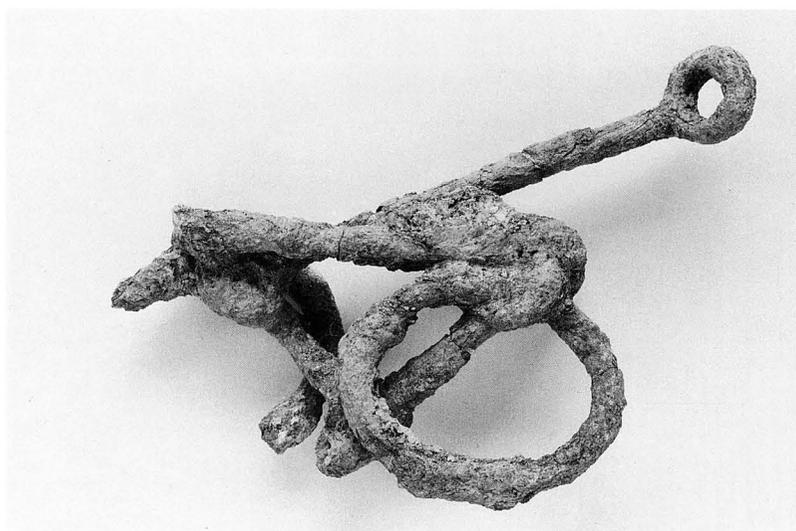
須恵器（短頸壺、蓋）



ミニチュア竈



環頭



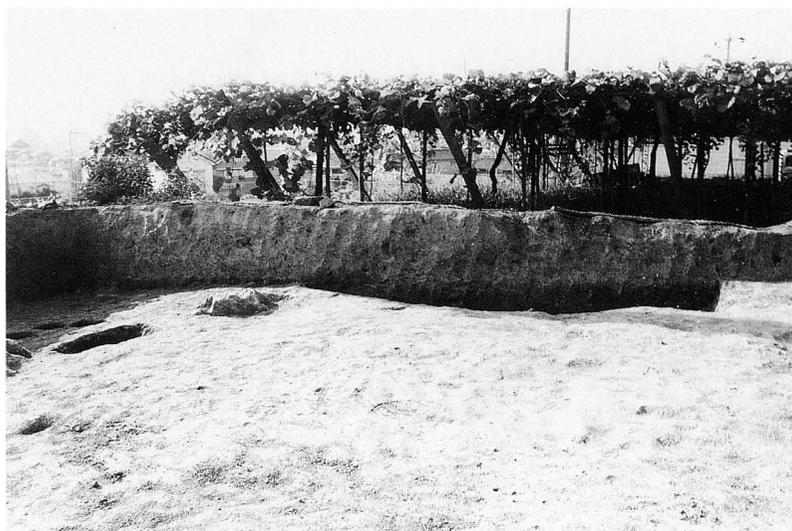
馬具 (轡)



石棺



遺構検出状況（北から）



北壁断面（南から）



出土軒丸瓦

柏原市遺跡群発掘調査概報
1992年度

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 0729-72-1501 内線5133
発行年月日 1993年3月31日
印刷 (株)近畿印刷センター

